

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：33919

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01228

研究課題名(和文) 保護施設の人類学 - 社会的保護から捉えるポスト家族の可能性

研究課題名(英文) Anthropology of Shelter : Social Protection of Women and Possibility of Post Family

研究代表者

山口 薫(桑島薫)(Yamaguchi, Kaoru)

名城大学・経営学部・教授

研究者番号：50750569

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：日本には、親密な相手からの暴力や家族による虐待、経済的困窮、障害や病気などの理由で家族から遺棄されるなど、行き場がなく、困窮した女性を対象に社会的保護を行う施設がある。本研究は、8市にある12の施設を訪問し、15本のインタビュー調査で得られた事例を基に、施設の回復支援プログラムと利用者の生活実態を明らかにし、いかなる共同性や関係性が当事者の回復への契機となっているのか、その一端を示した。研究協力者による海外の事例研究と比較しつつ、「家族」の現実を捉え、入所女性の「回復」とは何か、また家族解体の先に構築され得る関係性・共同性と「家族」の可能性について考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

人類学的関心に立つ本研究は、現代日本における女性の保護施設という社会の周辺から家族解体の先に生まれる関係性および共同性に着目するなかで、入所者の「回復」に向かう際に共通する特徴的な点として、身体ケア、日常的な関係性、空間構造、という3点を焦点化した。施設での微細な日常のやり取りや行動を人類学的に考察することで、「回復」とは何かを学問的に追求した。また、保護施設が社会的な変化に応じた体制を組む必要性を示し、「家族」と「保護施設」のあいだにある、施設の空間や構造の重要性、日常的に醸造される関係性により着目することの重要性を指摘したことは、社会的な意義を持つ。

研究成果の概要(英文)：This research aims to shed light on the reality of "family" in contemporary Japan by exploring questions such as: What kind of relationship and community is constructed beyond the dismantling of the family, and what makes it possible for a "family" to be a "family"? Based on visits to 12 facilities in 8 cities and 15 interviews, the study reported various support programs of the facilities and the actual living conditions of the users. Three common characteristic points were focused in the residents' process toward "recovery": (1) care of the body, (2) relationships brewed in daily life, and (3) relationship with space and structure of facilities.

研究分野：文化人類学

キーワード：女性 保護 保護施設 家族 共同体 親密性 性愛

1. 研究開始当初の背景

日本には、親密な相手からの暴力や家族による虐待、経済的困窮、障害や病気などの理由で家族から遺棄されるなど、行き場のない困窮した人々を対象とした様々な社会福祉施設がある。とりわけ女性を対象とした施設には、売春防止法、配偶者暴力防止法、児童福祉法などの根拠法に基づいて運営される、婦人保護施設（47 箇所、定員約 1200）や母子生活支援施設（204 箇所、定員約 4200）などがあるほか、NPO 法人などの民間団体が運営する DV 被害者のためのシェルター（約 100 箇所）や依存症からの回復支援施設（96 箇所が厚生労働省）などが女性の一時的な保護をおこなっている¹。

これらの施設では、物理的に住む場所を提供するのみならず、暴力被害や薬物依存からの「回復」や経済的な自立などを目指す多様な支援が行われており、共同生活をとおして女性たちの「回復」「自立」に向かうプロセスが報告されている。

社会的な保護施設に来る女性たちは、家族との関係が切れていたり、家族からの暴力や虐待を背景に持つ場合が多い。家族の「欠損」や「機能不全」はこうした女性たちに共通する問題として指摘されており、欠けた家族のケアや機能を保護施設での生活が補完する側面がある。施設という生活空間において、いかなる共同性や関係性が醸成されており、それらはいかに「家族」の欠損を代替し得るのだろうか。本研究にとって、現代日本の「家族」を相対化することが課題としてあり、そのために、アフリカの家族研究および米国の性愛研究を専門とする研究協力者と研究を進める。

2. 研究の目的

本研究の目的は現代日本における「家族」の現実を保護施設から照射することにある。具体的には、女性を対象とした保護施設の生活の実情を把握し、入所者にとって家族解体の先にどのような関係性・共同性が構築されているのか、さらにそれらはいかに「家族」の欠損を代替し得るのかを探ることを目指すものである。

3. 研究の方法

女性を対象とした保護施設のうち、横浜、名古屋、仙台など国内の 8 市において、母子生活支援施設、障害者施設、婦人保護施設、DV シェルター、依存症回復施設などに関わる職員およびケアスタッフ施設利用経験者に対し、16 本のインタビュー調査を実施した（名城大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」承認番号 2020-12）。訪問した施設は 12 箇所であった。2020 年度～2023 年度の 4 年間にわたり、女性の社会的な保護を行なっている施設を中心に聞き取り調査を行った。コロナ感染拡大のため、予定されていた保護施設でのフィールドワークが制限されたため、施設利用者に混じって活動に参加する調査を実施することはできなかった。

4. 研究成果

（1）本研究の成果

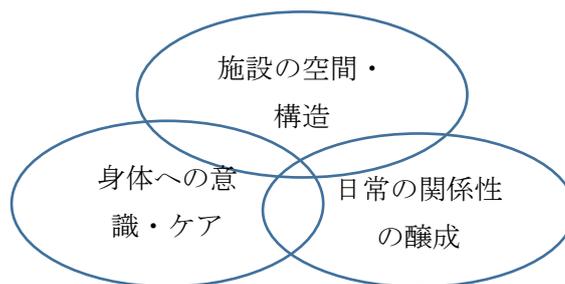
現代日本における女性の保護施設という社会の周辺から、人間の「回復」や家族との関係について考察する具体的な事例を収集した。限定的ではあるものの、さまざまな女性の保護施設を横

¹ 婦人保護施設と母子生活支援施設はいずれも厚生労働省の調査結果で報告された令和 4 年時点の数。民間シェルターは内閣府男女共同参画局のウェブページに令和 2 年時点で掲載されたもの。依存症回復支援施設は厚生労働省のウェブページに掲載された令和 5 年時点の数。

断的に調査し、背後にある「家族」の問題を参照しつつ、施設の回復支援プログラムと利用者の生活実態を明らかにし、いかなる共同性や関係性が当事者の「回復」への契機となっているのか、その一端を示した。具体的には以下のとおりである。

施設によって程度の差はあるものの、入所者の「回復」に向かう際に共通する特徴的な点として、①身体へのケア、②関係性の醸成、③空間との関係、という3点が浮上した。①身体へのケアとして、施設では、農作業、料理、マラソンといった一般的な活動のほか、ソマティックワーク（身体を動かすことで行う心理ケア）など、身体と関わる活動が行われていた。②関係性の醸成については、施設で暮らす他の利用者やスタッフとの日常的な会話ややり取りが何かしらの影響を及ぼしていた。特に食事は、各利用者の生育家庭の環境や価値観の違いを知る重要な手がかりを提供する場であるとともに、調理者に自分の好みのメニューを具体的に注文できることが利用者の回復の一つの目安となることもある。③空間との関係とは、施設の空間や構造が入所者の回復にとって重要な役割を果たしている点があげられる。たとえば、施設の屋上から見る星、踊り場の光、長い廊下を歩くこと、部屋の壁に背をついたり、施設内のチャペルにいることが入所者にとっての重要な気づきを与えてくれるものとして言及されていた。回復は支援プログラムの内容のみならず、施設の同居者やスタッフとの会話や、施設内の空間や建物の構造との関係が相互に作用し合っていると思われる。

<施設は生活という実験的空間>



(2) 研究協力者による海外の事例研究が明らかにした「家族」の多面性

2名の研究協力者によって、アフリカのウガンダのスラムに難民定住した家族や、アメリカ合衆国のポリアモリーと称される複数のパートナーを持つ性愛関係の事例が報告された。前者では、ケアという側面から捉える「家族」は外部へ開かれたものであり、スラムの外の世界とのつながりのなかで再編され続けていることの意味が、都市人類学および医療人類学の理論的枠組みから明らかにされた。後者は、ポリアモリーと称される複数のパートナーを持つ性愛関係を事例に、ケアのあり方や倫理や主体形成における自己と他者のかかわりなど、主体やケアの理論化に貢献する研究成果を報告した。「家族」の多面的な現実を実証したこれらの海外の事例研究は、規範的な家族観の相対化のみならず、いかに人間の関係は支え、構成され得るのかを探ることから「家族」を炙り出していく方向性を示した点で、本研究にとって非常に意義を持つ。

(3) 本研究の成果のまとめ

本研究の成果は主に以下の6点に集約される。

- ①社会変化やライフスタイル、利用者の SNS 利用やニーズの変化に伴い、社会変化にさらされる保護施設の姿を捉えた。
- ②制度的な社会的保護による問題解決の限界を指摘した。
- ③保護施設の入所女性の抱える背景に、共通項として家族からの暴力や虐待があることを再確

認した。

④施設において利用者の日々の生活の場や空間との関わりにおいて生成する「回復」への力や契機を示唆する事例データを収集した。

⑤「家族」の多面的な現実を海外の事例から実証した。

⑥保護施設の意義を、家族解体—社会的保護—回復・自立という単線的な結びつきや支援プログラムだけで捉えるのではなく、保護空間の日常にみられる微細な変化から捉える必要性を指摘した。

研究成果の概要

日本には、親密な相手からの暴力や家族による虐待、経済的困窮、障害や病気などの理由で家族から遺棄されるなど、行き場がなく、困窮した女性を対象とした施設がある。本研究は、女性の社会的保護を行う施設の質的調査を基に、「家族」の現実を捉え、入所女性の「回復」とは何か、また家族解体の先に構築され得る関係性・共同性と「家族」の可能性について考察するものである。8市にある12の施設を訪問し、17本のインタビュー調査で得られた事例を基に、背後にある「家族」の問題を参照しつつ、施設の回復支援プログラムと利用者の生活実態を明らかにし、いかなる共同性や関係性が当事者の回復への契機となっているのか、その一端を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

人類学的関心に立つ本研究は、家族解体の先に生まれる関係性および共同性に着目するなかで、入所者の「回復」に向かう際に共通する特徴的な点として、①身体のケア、②日常的な関係性、③空間構造、という3点を抽出した。施設での微細な日常のやり取りや行動を人類学的に考察することで、「回復」とは何かを学問的に追求した。また、保護施設が社会的な変化に応じた体制を組む必要性を示し、「家族」と「保護施設」のあいだにある、施設の空間や構造の重要性、日常的に醸造される関係性により着目することの重要性を指摘したことは、社会的な意義を持つ。さらに、研究協力者による家族や性愛を対象とした海外事例と比較、考察することで、「家族」の多面的な現実を実証し、規範的な家族観の相対化のみならず、共同体における人と人の関係を支え、構成するものに目を向けることが今後の「家族」研究にとって重要であることを示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 桑島薫	4. 巻 88-4
2. 論文標題 「狭間を探求するー日本の人類学DV研究が捉える家父長制の具現化と暴力の痕跡」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 692-711
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jjcanth.87.1_f4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kaoru Kuwajima	4. 巻 57
2. 論文標題 Domestic Violence Victims as Social Welfare Recipients: a critical analysis of the implementation of Domestic Violence policy at the local level	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 名城大学人文紀要	6. 最初と最後の頁 19-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桑島薫	4. 巻 13
2. 論文標題 書評『母と子の未来へのまなざし：母子生活支援施設カサ・デ・サンタマリアの25年』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中部福祉学研究	6. 最初と最後の頁 25-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件（うち招待講演 7件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森口岳
2. 発表標題 「ポリガミー的な生とは何か：アフリカ、ウガンダの複数婚的關係性から考える」
3. 学会等名 「ポリアモリーウィーク 2024」（於 オンライン・イベント）（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 森口岳
2. 発表標題 「グローバル・サウスから見た「貧困」と「開発」：アフリカにおける次世代のビジネスを考える」
3. 学会等名 「「ビジネスモデル」をキーワードとした創造的課題解決能力の育成事業」（於 名城大学経営学部）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 森口岳
2. 発表標題 「女たちは逃げ、踊る：ウガンダ、カンパラにおけるパーガールたちと都市人類学の手法」
3. 学会等名 「第260回アフリカ地域研究会」（於 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 森口岳
2. 発表標題 「家族の政治学：ウガンダ、カンパラのNスラムの移民家族を事例にした民族誌」
3. 学会等名 「日本文化人類学会 第57回 研究大会」（於 広島県立大学）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 深海菊絵
2. 発表標題 「個人主義とコミットメント 米国「ソロ・ポリアモリー」のケア関係を事例として」
3. 学会等名 2023年度家族問題研究学会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 深海菊絵
2. 発表標題 「つながりの実験：ポリアモリーにおける共生と技術」
3. 学会等名 2023年度日本文化人類学会シンポジウム「縮減する社会における家族・親族研究と文化人類学 いかようにもありうる生の尊厳に向けて」 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 桑島薫
2. 発表標題 「ケア、暴力、親密性:侵食する欲望」
3. 学会等名 国立民族学博物館「心配と係り合いの人類学的探究」研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森口岳
2. 発表標題 ケアからの逃走：ウガンダ、カンパラのスラムでの「心配と係り合い」に関する考察
3. 学会等名 日本文化人類学会第55回研究大会 分科会「心配と係り合いについての人類学的探求」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森口岳
2. 発表標題 「他者のリアリティ」としての民族誌試論(1)：村上春樹の小説手法と70～80年代の実験的民族誌との比較
3. 学会等名 エスノグラフィーとフィクション研究会 第3回研究発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森口岳
2. 発表標題 ケアからの逃走あるいは地域研究のススメ
3. 学会等名 岡山大学ヘルスシステム統合科学研究科ヒューマンケアイノベーション部門オンライン講演会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森口岳
2. 発表標題 家族の政治学：ウガンダのスラムの一家族を事例にケアと葛藤をめぐって
3. 学会等名 国立民族学博物館「心配と係り合いの人類学的探究」研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森口岳
2. 発表標題 「ケアの共同体」の忌避と再生成
3. 学会等名 岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科 令和3年度 第5回 次世代統合科学研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 桑島薫
2. 発表標題 「自立」とケアの間：女性保護施設における「回復」の過程
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究会「心配と係り合いについての人類学的探求」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 桑島薫
2. 発表標題 他者の痛みの接近：DV被害者の一時保護施設における支援から自他関係を考える
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究会「心配と係り合いについての人類学的探求」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森口岳
2. 発表標題 ケアの政治学から生態学へ ウガンダ、ナムウォンゴ・スラムで心配と係り合いについての考察
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究会「心配と係り合いについての人類学的探求」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 深海菊絵
2. 発表標題 ポリアモリーから考える家族の多様性
3. 学会等名 ビジネスプラットフォーム革新協議会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 深海菊絵
2. 発表標題 ポリアモリーとは何か：日本人の恋愛と結婚のゆくえ
3. 学会等名 『毎日メディアカフェ』毎日新聞社（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 日本家族社会学会（桑島薫、深海菊絵 ほか）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 754
3. 書名 『家族社会学事典』	
1. 著者名 ジェンダー事典編集委員会（深海菊絵 ほか）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 800
3. 書名 『ジェンダー事典』	
1. 著者名 植村恒一郎、横田祐美子、深海菊絵、岡野八代、志田哲之、阪井裕一郎、久保田裕之	4. 発行年 2022年
2. 出版社 白澤社	5. 総ページ数 252
3. 書名 結婚の自由：「最小結婚」から考える	
1. 著者名 Maho Araki, Tamara Enomoto, Kolawole Gbolahan, Toru Hamaguchi, Itsuhiro Hazama, Minga Mbweck Kongo, Masayuki, Komeyama, Kharnita Mohamed, Gaku Moriguchi, Zuziwe Msomi, Francis B. Nyamnjoh, Berni Searle, Marlon Swai, Noriko Tahara, Toshiki Tsuchitori, and Kiyoshi Umeya	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Langaa RPCIG, Cameroon	5. 総ページ数 24
3. 書名 Bouncing Back: Critical Reflections on the Resilience Concept in Japan and South Africa	

1. 著者名 高橋幸・永田夏来・深海菊絵 ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 475
3. 書名 現代思想 特集 = 恋愛 の現在	

1. 著者名 神本秀爾・河野世莉奈・宮本聡・深海菊絵 ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 集広舎	5. 総ページ数 304
3. 書名 ヒューマン・スタディーズ 世界で語る / 世界に語る	

1. 著者名 石井美保・岩谷彩子・金谷美和・河西瑛里子・深海菊絵ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 296
3. 書名 官能の人類学 感覚論的転回を超えて	

1. 著者名 深海菊絵 ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 人間文化研究機構 国立民族学博物館	5. 総ページ数 20
3. 書名 月刊みんばく2021年4月号	

1. 著者名 小川公代・小林エリカ・深海菊絵 ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 早稲田文学会	5. 総ページ数 301
3. 書名 早稲田文学 増刊号 家族	

1. 著者名 春日直樹・竹沢尚一郎・深海菊絵 ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 有斐閣アルマ	5. 総ページ数 308
3. 書名 文化人類学のエッセンス	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	森口 岳 (MORIGUCHI Gaku)	東洋大学 (32663)	
研究協力者	深海 菊絵 (FUKAMI Kikue)	国立民族学博物館 (64401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------